

一二六 五十日祭合祀祭

此の小床を被い清めて今し祖靈社に遷し奉り鎮め奉る故△△△△刀自の御霊の御前に 天理教

分教会長

慎み敬い恐みくも白さく

青空を行く麗かなる陽の光にも 俄に黒雲が蔽いて 厳しき雨風に変わるが如く 秋の野山を飾る紅葉の美わしさにも吹き荒ぶ嵐の嘆きあるが如く あわれ汝刀自はも現身の慣い得免がれ給わずして 九十五歳という長寿ながらこれの現世を退向になして 覆水盆に返らずの言葉の如く果敢なく来世に隠り給いぬ 今も尚現世に壮健に立ち働きて何処にか在すが如く思ほゆるも 矢張り呼べどもその答はなく 戸の外に出でて見渡せどその御姿はあらず 誠に云わぬ術為す術なし 限なき月影を見ればありし日を偲び さ、やかなる風の音を聞けば つとめ勞かれし長の年月を思い起こしつ、露に花咲く志草 忘る、日なく偲び出でぬ時なく 早くも五十日は夢の間と過ぎ去りて あわれ淋しき中にも今し合祀の御祭に併せて五十日の靈祭かくの如く仕え奉る時となりにけり 故に家族親族相識れる人々 これの席に打寄り集い 汝刀自より耳にせし語り草たる琵琶湖の辺なる田舎での幼き頃 あるいはその度毎眼を細めていと懐かしげなる面持を見せられし中国は漢口での初婚の頃 また△△△△氏と再婚されし後 長の年月山形なる△町にて幾多の風雪をしのぎ山坂を踏み越えられし中年の頃 次いで西武△ヶ丘の程近き入間市〇〇なるこれの自宅にて静かに老いの身を預けられし晩年の頃など 日を追い月を追いて汝刀自の面影を思い浮かべ瞼に描きとりどりの話の花を咲かせつ、心より御霊を宇良賀志奉らくと 御前に御酒御食種々の味物を供え奉りて 露の玉串捧げ奉り拜み奉らくを平けく安けく聞食し諾い給い 引き続き遺れる家族親族たちが真心を籠めてこの程購われし千代の住所と定め奉れる新しき御墓所に 汝刀自の御遺骸を納め奉る御墓の御祭仕え奉らんとす 時にいとしき汝刀自が娘婿であり 眼に入れても痛くなき可愛い孫たちの父親なる△△△△大人が今を去る八年前未だ若き五十五歳ながら一足先に親神のふところに帰り給い その衣を〇〇分教会の御墓に暫しお鎮め申し 時機の到るを待ち望みてありしが この旬に汝刀自と共に埋葬の御祭を執り行い 母子の契りを更に深めんとす 故にこの態を甘らに安らに聞食し これより後汝刀自が幾多の節又節の中些かも挫けることなく生涯を貫かれ その姿を〇子△子の二人に移されしお道の信仰を末代かけて守り抜かれ 思召下さる陽氣ぐらしの人の世が これの地上に見えてくると共に 天翔り国翔り〇〇家△△家を始めとして その縁深き人々を幸く真幸く恵み幸え給えんと恐みくも白す